第５回研究大会

口頭発表「飼育動物とのかかわりを通して育つ力」

加茂麻由佳

1　はじめに

本園の園庭の一角には比較的広い小動物広場がある．その広場にはトンネルつきの石山などがありうさぎやチャボが生活しやすい場所になっている．登園してきた子ども達が小屋の鍵をあけると，広場の中をうさぎやチャボが自由に動きまわったり，地面を掘ったりトンネルに隠れたりして遊んでいる．また，暖かい季節には広場から出すことでさら広い園庭でうさぎやチャボがのびのびと走り回り，より動物の自然な姿や生態に子どもたちが身近に触れられるような環境を大切にしている．このような飼育環境の中で動物に親しみをもち，心を寄せ，感性を揺さぶるような飼育体験を積み重ねていきたいと願っているが，子ども達に具体的にどのような力が育っているのだろうか．「自由な場での動物とのかかわり」「飼育当番活動」両面からのエピソードを通して昨年度担任した年長の子ども達の具体的な姿や言葉から探ってみた．

2　自由な場での動物とのかかわりを通して

(1) 安定の場として

年長になってから保育室に飼育小屋が近くなったということもあり，チャボと一緒にあそぶようになる．進級時の環境の変化の中で不安定になっている子どもはチャボやウサギを抱くことでその温かさを感じながら，動物に心をあずけ安定していく様子も見られた．

(2) 小動物が伸び伸びと生活できる環境を通して

好きな子ども達は毎日のように鍵を開けに行ってはうさぎやチャボを出してやるようになった．うさぎによっては抱かれるのを嫌がるものもおり，抱こうとすると走りまわって逃げたり，足で引っかいたりするが，子どもたちはそれでも諦めずに関わろうとするようになっていった．

また，うさぎが勝手に広場から園庭の外へ脱走することもあり，さらに脱走したうさぎを小屋へ入れようと追いかけていると，逃げ惑ったうさぎが門から園外に出て行ってしまうこともあった．このような体験からうさぎを抱いたり，餌をやったりするだけではなく各々の動物がもっている習性や性格を感じたり，より観察したりする姿が見られた．

(3) 小動物の病気や死を通して

幼稚園では動物の死や病気に直面することがある．難しい病気の話をしても子どもたちには理解しにくいので，獣医師に聞いた話を幼児にも分かりやすく説明したり，子どもたちにもできる手当てや看病を一緒にしたりしてかかわっている．病気になった姿や弱って死んでいく姿をありのまま受け止めながら，「どうして病気になったのかな？」「これからどうしてあげたらいいのかな？」と思いを寄せていくことを大切にしていった．

◇エピソード①『先生おもしろいで』

サークルの中は土の地面なのでうさぎが自由に穴を掘って生活をしている．その穴は土の下で複雑につながっているようで，うさぎ達は入っては違う出口から出るというようなことをする．特に子ども達が抱こうとして追いかけると手の届かない所に逃げるのでそのような様子がよく見られる．その様子がおもしろくてしかたがないＡ児．「先生，おもしろいで．見て」「うさぎのトンネルやな」と言いながらうさぎを捕まえてはお尻を押して穴の中に入れて出口から出てくることを繰り返し見ていた．

＜考察＞

★ うさぎの習性が見られる環境にあるからこそ気がついた面白さではないだろうか．飼育小屋がコンクリートだけでできていては

この面白さには出会うことができないだろう．上賀茂幼稚園ならではの子どもの姿であると感じた．

★ 気づいたことに心を弾ませて何度も繰り返し見ているA児．一見したところ「じっと見ている」だけに見えてしまうかもしれないが，A児は「なんて面白いんだろう」と感性を揺さぶられているのではないか．

◇エピソード②『レイちゃんの死』10月

腹部がはれ上がり歩くことも困難になり始め，体温も下がってきていたチャボのレイちゃん．寒い小屋の中はかわいそうだと思い，子ども達と一緒に部屋の前に小さなかごをもってきて，餌を入れたりしていた「大丈夫かな？」「レイちゃんにお布団もってきたよ」いろいろな子ども達が遊びの合間にレイちゃんに声をかけたりしていた．保育室の前につれてきたその日に子ども達の声を聞いて安心するように亡くなった．「なんで死んでしまったのかな？」「ミルとけんかしたのかな？」「ごはん食べ過ぎたのかな？」と子ども達は話し合っていた．「最後にみんながこんなに優しくしてくれてレイちゃんきっと嬉しかっただろうね」と話をしていた．
レイちゃんが動物病院に行く（解剖のため寸前までレイちゃんの体をなでたり，抱いたりしていたB児．チャボが大好きで頬擦りしては遊んでいただけにレイちゃんの死は深くB児の心に響いていたようだ．他のチャボを連れてきて「レイちゃんお別れやで」と顔を見せてやったりして，最後に車の扉を閉めるときには「レイちゃん天国で待っててな．会いに行くし」と声をかけていた．

＜考察＞

★ 教師が一方的に「こういう原因で亡くなったんだ」という事実を押し付けるのではなく，子ども達が自分たちなりに心を寄せて「なんで？」「どうして？」「どうしたらよかったの？」と考える経験が大事ではないだろうか．

★ チャボが大好きなB児は一見すると関わり方が荒いのだが誰よりも心を寄せていた．自分の思いを言葉でうまく表せないB児が別れ際にかけた言葉は本当に心の底から出てきた言葉だと感じた．

★ 時には遊び仲間として，時には癒しを与えてくれる存在として，同じ命ある生き物として園内に動物がいることで子ども達の心の成長に与える影響は大きいと感じる．相手が言葉の通じない相手であっても，その思いを汲み取ろうとしたり思いを寄せたりできる子どもになっていくのではないだろうか．

◇エピソード③“ラロン”の看病より
『おしっこが出てよかったね』

子どもたちと動物とのかかわりが深まった３学期．うさぎの“ラロン”が病気になるヘルニアで膀胱がぽっこり出てしまい，自力で尿が出せなくなり放っておくと膀胱がパンパンに腫れてしまうというものだった．獣医師にも見てもらい，できるだけ清潔にして膀胱を優しく押して尿をだしてやることと，一日一回薬を飲ませるということを子どもたちと一緒にしていくことになった．
毎朝登園してくると，小屋まで“ラロン”を連れにいきお湯をたらいにはって体を洗った．その後には嫌がって暴れる“ラロン”に「駄目だよ．薬飲まないとよくならないよ」「ちゃんと飲んだね．えらいぞ」と声をかけながら優しく薬を飲ませたりもした．『早くよくなってほしい』その一心で看病していたので尿が出たときには「汚い」「臭い」ではなく「やった．おしっこでたよ」「おしっこが出てよかったね」と喜んでいた．

＜考察＞

★ “ラロン”の下腹部は痛々しく見ていられないほどただれていたが「気持ち悪い」とか「触りたくない」と言う子どもは一人もいなかった．「痛そうやな」「大丈夫か？」と“ラロン”のことを思いやり毎日優しい言葉をかけていた．幼稚園の中で共に生活してきたからこそのかかわりであると感じた．

★ 言葉を話せない動物の身になり相手の思いを考えて，行動する姿が見られた．今までにもチャボの死を経験したり，自分たちが

年少のときに年長児がうさぎの看病をしたりしているのを見たりしてきたことが積み重なっているのだろう.

3　飼育当番活動を通して

(1) 一学期前半

一学期最初の頃は教師が一緒にやりたい子どもと掃除をしていった. しかし, 動物の好きな子どもは毎日のように掃除をしにきて, 全く興味のない子どもは「臭いから嫌だ」と小屋に寄りつこうともしない. このままでいいのだろうか？と考え, 掃除を今までしてきた子ども達が各グループに入るように編成し, その子ども達から掃除の仕方だけでなく動物に対する気持ちも伝えていくことはできないだろうかと考える.

最初は今まで掃除をしてきた子ども達だけが掃除をしていたり, わざとではないのに水がかかってしまったことでけんかになって掃除ができなかったりしていた.

(2) 一学期後半から二学期前半

それから何度も当番活動を重ねていくことで, 今まで動物小屋には寄りつかなかった子ども達が小屋の中でえさをやったり抱いたりして遊んでいる姿が見られるようになった. またどの子どももある程度掃除の仕方がわかるようになっていった. 2 学期になりプール遊びや運動会などがあり, ゆっくりと当番活動ができない日が続いた. 継続することの大切さを思いながらも運動会が終わるまでは継続的な活動はできていなかった.

運動会が終わった10月頃にはクラスの子ども達の人間関係の広まりや深まりがみられるようになったのでグループ変えを提案する. 今度は教師が決めるのではなく自分たちが一緒に当番活動をしたい友達とグループになる. その際『必ず最後まですること. 遊びたいことがあっても友達と相談して幼稚園から帰るまでには掃除をすること』と約束する.

当番活動だけでなく, チャボと一緒に三輪車に乗ったりうさぎのあかちゃんを大事に抱いて遊んだりするなどかかわりが深まっていった.

(3) 2学期後半～3学期

掃除の仕方も分かり, 友達と役割分担して掃除をしたり, 餌きり用の包丁やまな板を最後まで片付けるようになったりと「最後までやり遂げる」姿がみられるようになった. 『やらされている当番活動』ではなく『やってあげたい・やったら気持ちいい当番活動』に変容していることを感じた.

4　まとめ

～自由な場での動物とのかかわりから～

- 「抱っこしたら温かいな」「自分があげたごはんを食べてくれて嬉しいな」そんな思いからまずは動物のことが大好きだという気持ちが育っていくのではないか. その気持ちが基盤となって一緒に遊んでいくなかで「うわぁ, おもしろい」「なんで？」「そうだったのか」など興味・関心・疑問・気づきが生まれてくるようになる. そこから「もっと知りたい」という意欲や知的好奇心や科学性の芽生えにつながっていくのではないか.
- 動物が身近に生活しているという環境であるからこそできる体験がたくさんあった. 図鑑や本で得た知識だけはなく自分たちの目で見て感じたことで, 動物の生態というものの一端に触れることができたのではないか.
- 『一緒に生活している, 命ある仲間』『大好きな友達』である動物達の生死を間近で見てきた. その度に「なんで死んでしまったの・・・」と涙を流してきた. そして「この亡くなった命はどうなっていくのだろう・・・」と思いを巡らせてきた. このように心を動かしかかわってきた経験の積み重ねによって『命の大切さ』『命の重さ』というものを感じることができたのではないか.

～飼育当番活動から～

- 最初は「臭い・汚い・できればやりたくない」という思いの子どももいただろう. しかし, 動物とのかかわりが深まっていくうちに「きれいにしてあげたい」「うさぎさん喜んでくれるかな」と動物の気持ちになって考えるようになっていった. 自分本位ではなく相手の立場になって考えようとする気持ちが育っていったのではないか.
- 友達と一緒に協力しながら当番活動をすすめていくなかで自分たちなりに見通しをもって行動しようとしたり, きまりを守って当番をしようとしたりするという主体的な姿につながっていった.
- 中途半端で終わるのではなくて, 自分たちの力で飼育当番を最後までやり遂げること

によって「自分たちだけでできるんだ」という自信や責任感の育ちにもつながっていった．

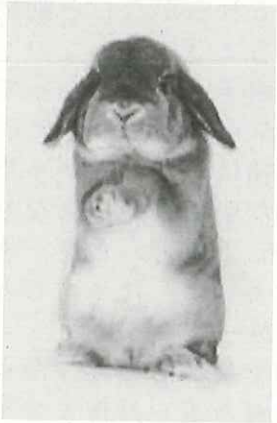
・ チャボの餌を切るときには「チャボさんの口って小さいから小さく切っているの」と言いながらきざんでいる姿が見られる．このようにチャボに心を寄せて餌を切っている姿を大切にしながら包丁の安全な使い方を時期や発達・年齢に応じて個別に指導していっている．このような中で子どもたちは『小さいお友達もいるから包丁は置きっぱなしにしない』など年少の子どもたちにも配慮し，自ら安全に気をつけたり工夫したりしながら行動できるようになっていった．

・ 鳥インフルエンザのニュースも子どもたちに伝えた．ニュースになったからといって小動物を遠ざけてしまうのではなく，体育健康教育室からの指導も受けながら保護者にきちんと説明し，理解を得るように努めるとともに，保健衛生面での指導をし，石鹸での手洗いやうがいを徹底し，習慣づけるようにした．

5　おわりに

飼育動物とのかかわりについて子どもの姿を追ってみると，本当にいきいきした子どもの姿・言葉に出会うことができた．今回私は「自由な場での動物とのかかわり」「飼育当番活動」の二つの視点で考えてみたが，この二つは相互に関係しあいながら子どもの育ちにつながっているのだということを改めて感じた．単に動物と仲良くなれればよいのではないし，単にきれいに飼育小屋の掃除ができるようになればよいのでもない，相互にかかわり合って子どもは育っていくのだ．幼稚園という教育の現場だからこそ子ども達の生活に密着した動物とのつながりがあるのだということ，そしてそこから育つ力というものが見えてきた．

また，これらの飼育動物とのかかわりは上賀茂幼稚園の中で代々受け継がれていっている．年少児は年長児が飼育当番活動をする姿を見て，「私も大きい組さんになったらやってみたい」と憧れを抱いている．また，入園当初動物に興味はあるがどうかかわっていいか分からず，チャボの羽を引っ張ったり，うさぎを走って追い掛け回したりしている年少児には年長児が「そんな風に引っ張ったらあかんで」「走って追い掛け回したら怖がってはるで」と優しく注意してくれることもある．このような縦のつながりも大事にしていきたい．

なお，研究大会において獣医師の先生方からエピソード①について「うさぎが自由に穴を掘れる環境はどうなのか？」というご意見をいただいた．本園は『穴の中でうさぎが死んでいる』ということや『知らないうちにどんどん繁殖してうさぎが何匹いるか分からない』というような劣悪な飼育状況ではなく，虚勢手術を含めうさぎの健康状態を常に把握できるよう努力している．また，一人の教員だけが飼育を担当しているのではなく，全教職員の協力と動物に対する愛情があってこそ今のような飼育活動ができているといえるだろう．やはり『幼児期において飼育動物を通して子どもに育てたいものは何なのか？』ということを考えると，土があってこそ見られたうさぎの習性・そして子どもの発見・心の動きを大事にしていきたいので，改善点を含め獣医師の先生方と相談し，よりよい飼育体験のありかたを探っていきたい．

（京都市立上賀茂幼稚園　教諭）